

【曲目解説】

歌劇「イドメネオ」は、マンハイムからパリへの旅行を経たモーツァルトに、ミュンヘン選帝侯カール・テオドールが、1781年の謝肉祭のために依頼したオペラ・セリア（正歌劇）です。テオドール侯は、当時マンハイムで音楽の振興に力を注いでいました。「イドメネオ」は、紀元前1200年頃のギリシャが舞台です。船で凱旋中難破に遭ったクレタの王イドメネオは、上陸後最初に会った人間を海神ネプチューンの生贄とするという条件で救われます。ところが、上陸後最初に会ってしまったのは、息子イダマンテでした。生贄になるのは、息子か、己か、で葛藤するイドメネオでしたが、最後は、イダマンテを国王とすることで、劇は無事結ばれます。劇の内容は、当時仲がうまうまなくなっていた、父レオポルドへの皮肉が込められていたのではないかと、とも思われます。序曲では、半音階、幅広い音程跳躍、短調・長調の急激な交代、激しい上昇音階など、感情の起伏を劇的に表現しています。当時隆盛のマンハイム楽派の影響が消化され、モーツァルトの音楽として、凝縮しているようです。

ベートーフェンは、ヴァイオリン協奏曲を、本日演奏する1曲のみ作曲しています。ヴァイオリン協奏曲は、バロックから現代まで、大変数多く作曲されています。この楽器の魅力を十二分に発揮した名作も多く、たくさんの方々が「ヴァイオリン協奏曲」を楽しまれていることでしょう。その中でも、このベートーフェンの協奏曲は、最も優れた作品の一つであると言えます。この曲は、1806年ベートーフェン36歳のときで、この年には、ピアノ協奏曲第4番、交響曲第4番、3曲の弦楽四重奏曲「ラズモフスキー」等が書かれています。驚くべき創作力の湧出であります。そういうエネルギーの充実と幸福感は、この年の他の傑作とともに、このヴァイオリン協奏曲にも満ち溢れています。この曲では、ベートーフェンとしては珍しく、主要主題は大変旋律的です。彼の交響曲の主題とはかなり異なった性格を持っています。独奏楽器のヴァイオリンの特徴を生かすためでもあります。そのメロディーの大半が上へと向かう旋律線を描いています。彼の気持ちの高まりを感じさせます。初演は、1806年12月23日、アン・デア・ウィーン劇場、独奏はフランツ・クレメントです。しかし、この名作は、初演後全く忘れ去られてしまいます。この傑作を再び世に出し、かつそれに相応しい地位を与えたのは、19世紀の名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムであります。なおこの曲は、後にベートーフェン自身がピアノ協奏曲に編曲していますが、そのカデンツァもベートーフェン自身が書いています。本日の演奏では、戸澤氏の意向で、このベートーフェン自作のピアノ協奏曲用カデンツァをヴァイオリン用に直したものを演奏いたします。独奏ヴァイオリンにティンパニーが伴奏するという大変珍しいものであります。

メンデルスゾーンには、よく知られ、演奏会でもしばしば取り上げられる交響曲が5曲ありますが、この他に、12歳から14歳にかけて作曲された、弦楽合奏のための交響曲が12曲あります。したがって、本日演奏する交響曲「第1番」は、実際には、メンデルスゾーン13番目の交響曲に当たります。出版に際して、初期の12曲が習作として無視されたため、「第1番」として出版されたのです。この曲が作曲されたのは1824年の前半ですが、この年の5月には、かのベートーフェンの「第九交響曲」が初演されています。

またシューベルトが「未完成交響曲」を完成させたのもほぼ同時期に当たります。当時メンデルスゾーンは弱冠15歳。古典派や当時の作曲家の影響が随所に見られるものの、15歳の作品としては完成後が高く、エネルギーッシュな曲の進行や優美な旋律は、正に彼の円熟期の作品を思わせます。なお、「影響」という点で、第1楽章の第二主題や第3楽章のトリオなど、シューベルトの「グレート交響曲」を連想させる部分がありますが、この曲の初演は1827年2月、「グレート」の作曲は1828年からですので、その関連はないと思われま